

ひと

街の弁護士から最高裁判事に就任した

やまうら
山浦 よしき
善樹 さん(65)

自分と2人の事務員。東京・神田の街中にある小さな事務所の「マチ弁」から、弁護士会の推薦を受け、「法の番人」に転身した。長野県旧丸子町(現上田市)出身。一橋大を出て銀行に就職したが、肌に合わず1年で退職した。道に迷ったとき、無医村で診療所を開いた妻の父の生き方が浮かんできた。困っている患者がいれば夜中

も山道をスクーターで往診した。「私もそんな人間になりたい」1年で司法試験に合格した。だが、恩師の禅寺の和尚に報告すると「お気の毒に」。戸惑った。

歴史に残る大事件を手がけたことはない。夫の暴力に悩む女性、障害者、公害患者。依頼を一つひとつ解決して10年たったころ、和尚の真意に気づいた。「自分のためではなく、不幸な人のために生きなさい、ということか」

7年間、法科大学院でも教えてきた。学生に必ず伝えたのは20年前の小さな店の立ち退き問題だ。経営者の女性は移転を拒む理由を言わなかった。3カ月通うと、学徒出陣した恋人と店で再会を誓っていたと教えてくれた。約束から40年過ぎていた。「きっと彼も分かってくれる」。数日後、「あなたに任せた」と連絡がきた。

無味乾燥に見える裁判の主張の裏にも、必ず人間の思いがある。「法律は人を幸せにする道具。記録に埋もれた当事者の苦しみをキヤッチして、判断していききたい」

文・山本亮介 写真・内田光



撮影・菅野靖

1日付で、「マチベン」から最高裁判所判事に就任した

顔

山浦 やまうら

善樹 よしきさん

65

東京の山手線沿

長野県上田市出身。197

いにあった、廃屋のようなビルヤード場が忘れられない。

1年に司法試験に合格し、有頂天で郷里に帰ると、旧知の僧侶から「お気の毒に」と言

バブルの頃、立ち退きを求められた高齢の女性経営者の相談に乗った。彼女は最初本

が直面する問題に身を削られるうち、言葉の意味が分かった。その後、個人事務所を開

心を見せなかったが、3か月たって、ようやく打ち明けた。

いた。庶民の心が街並みに宿る東京・神田。「マチベン」

「戦地に出た男子学生からキユーを託され、帰りを待っている」と。

(街の弁護士)一筋で活動してきた。

はっとした。女性は話したことで吹っ切れたのか、間もなく退去を決めた。「弁護士

山本周五郎赤ひげ診療譚」が愛読書という。江戸庶民を支えた医師を手本に、年間8

は型にはまった解決方法を考えがちなが、当事者の心情や背景を知ることが大切なこと

もある」。そう思った。000件の裁判が持ち込まれる最高裁の法壇に上がる。

(社会部 児玉浩太郎)